

2013年国民文化祭プレ公演・第11回ハロー山梨プロデュース公演

世にも不思議な二つの物語

Aグループ

『天才たちの午後』 演出・清野 知之
(劇団 B-BLACK)

Bグループ

『カラスの群れと駱駝たち』 演出・相原 和也
(山梨大学 劇団十三番劇庫)



絵・関根悠一郎

作 藤谷 清六

スタッフ

音楽

大道具

芸術監督

刺青・担当

照明

音響

舞台監督

舞台助監督

進行・連絡

衣装

衣装 (おまなみ)

メイク (やまなみ)

メイク

メイク

小道具

小道具

映像・DVD制作

映像・DVD制作

宣伝・デザイン

スチール写真

広報

制作

制作

制作

制作

制作

挿絵

挿絵

Aプロデューサー

プロデューサー

チャイルドフット

高橋 誠

設和 幹

鎌倉博美

大槻一夫

塚田 仁

安藤正之

内藤隆彰

近藤千恵子

佐藤眞佐美

佐野 市子

小澤優美

小林トコ

小野諭佳梨

田中来実

石原美歩

田中静男

望月敬子

鷹野亮司

鷹野美香

ツービッツ

山中 勲

松永博美

小林由季

阪本公子

土井マチ子

小松正彦

守屋杉男

関根悠一郎

ソウガイマムラ

島津久美子

山本真樹

■公演日 / 2012年8月25日(土) 18:00 開場 18:30 開演
8月26日(日) 13:30 開場 14:00 開演

■場 所 / 甲斐市 双葉ふれあい文化館

■入場料 / 前売券 1,500円 当日券 2,000円(全席自由)

(中・高生1,000円/小学生以下無料)

■お問い合わせ / 土井 マチ子:090-4932-8147 ✉ kuninakadoi063@docomo.ne.jp

藤谷 清六:090-3244-8006 ✉ maki@mozidas.co.jp

「藤谷清六は天才である」



山梨県立大学 学長
伊藤 洋

頭の良い人をつかまえて「彼は秀才だよ」とか「いや奴は天才だ」などと言う。辞書で調べてみると、秀才については「①学問・才能のすぐれた人。②中国で、科学の科目の一。また、その合格者・・・③・・・」（三省堂『大辞林』）などとあるが、「天才」については同じ辞書でも「生まれつき備わっている、きわめてすぐれた才能。また、その持ち主」などとあって説明に厳密さを欠く。「秀才」が大学入試や国家公務員上級職試験・司法試験のような総じて「権威ある」知的難関を突破する能力の高さについて表現するのに対して、天才にはそういう権威が添えられていない。

「秀才」が、すでに確立されているシステムや組織をより整序なものとする能力を要求されるのに対して、天才はそういう殻には収まらないからだろう。天才には凡人には理解し難いものが見えたり聴こえたり、また時として既成の組織や秩序を超越したり、破壊したり、更には全く新たな秩序を作ってしまうことさえある。ちなみに芥川龍之介は文壇の秀才だが、龍之介が描いた「平中」は天才である。

ここに発表される2作品「天才たちの午後」と「カラスの群れと駱駝たち」の原作者藤谷清六は秀才か天才かと問われたら、私は躊躇せず天才であると答える。これらの作品が藤谷の何作目になるのかを数えていないが、彼は確実に「演劇」の秩序破壊を始めているからである。

「新境地」だぜえ！

作者の藤谷清六さんは、今回の作品を自ら「新境地だ」と言う。ご存じのように、清六さんは還暦以後10年以上にわたりほぼ毎年新作戯曲を次から次に執筆、私費を投じて上演（製作、演出あるいは主演）もしてこられた。

だが、今回「新境地」を謳（うた）うのに、大事な演出を若者たちに任せ、自分は製作に専念しているのはちょっと怪しい。一体何が「新境地」なのか？勝手に推測してみた。

まず第1に、構成をまったく異質に見える「A」と「B」の2本立てとしたのは確かに斬新だ。しかし、「B」のエンディングで、あなたは「そうだったのか！」とつぶやくことになるだろう。

第2に、シュールへの挑戦である。特に「B」はめっちゃめっちゃシュールだ。六本木のマンションにある衣装ダンスからナルニアならぬサハラ砂漠へと通じており、女に殺されたはずの男2人や彼らをめぐる男女が行ったり来たり。あなたは心の中で「え、何で…？ どうして？」を連発することになるだろう。

第3は、「そろそろ若い世代を育てなければ」という清六さんの使命感の発露である（どうやら健康診断の結果のせいらしい）。

「A」演出の清野さんは若手ナンバーワンと評される実力派俳優、「B」演出の相原くんはナシ大工学部4年生。二人が清六さんの期待によく応えたかどうか？ 終幕にあなたと一緒に「ブラボー！」と叫びたい。



名城大学等非常勤講師
浜崎 紘一

常に劇的～映画と異なる芝居の楽しみ方。

今回の公演は、もちろん共に藤谷清六作ではあるが、2つの舞台、2つの世界を味わうことができる。芝居の内容も常に挑戦的だが、今年は2作とも演出を別に立てた。台本はキャストを想定して書いたそうだが、新しい出会いでどんな舞台になるか興味が尽きない。

2グループの台本冒頭、Aでは「舞台奥に平安朝時代の牛車があり生きた牛が繋がれている」、そしてBは「明かりが点くと、ここはサハラ砂漠である」から始まる。それが、同じこの会場で展開する。作家が「サハラだ」といえば、もう「ここはサハラ」である。誰も文句を言えない。今のご時世、映画では口ケ費がかかるのでシナリオを書き変えるか、鳥取砂丘あたりで誤魔化すことになるが、まさに劇的空間のなせるワザである。

映画では、回想シーンやカットバック、オーバーラップなど当たり前だが、芝居では難しい。その代わりに、異なる役者の登場や小さな調度品一つで空間の意味を変えられる。何と自由なことか。今回は、そうした空間の多層性、多重性が見ものでもある。

清六さんの創造力とお客様の想像力のぶつかり合いが楽しみだ。



山梨県立大学
国際政策学部教授
前澤 哲爾

「作者から一言」



作
藤谷 清六

「言わなければ解らない人には、言っても解らない。」つまり、「解る人には言わなくても解ります。」例えば、友人、または恋人と美術館を歩いている時、期せずして二人の足が一枚の絵の前で止まり感動を共有することがあります。友情・愛情を確認できる幸せな時です。これが「解る」ということです。この感覚こそ世界各地の紛争を減少させ、離婚率を抑える妙薬になるのではないのでしょうか？ そもそも芸術は、論理を超え、筋が通らぬ事を認め、矛盾を楽しみ、美的感覚を研ぎ澄ますことによって生まれるものだと思います。世の中、矛盾だらけで筋の通らぬことばかり、今こそ芸術の花咲く時代ではないのでしょうか？ この物語を舞台で立体化するにあたり役者さんに望むことは、心地よいリズムで蝶のように舞い、蜂のように刺すことです。笑う、泣く、喜ぶ、怒る、唄う、踊る等々の切り替えは瞬時に行われ、笑いながら泣き、泣きながら笑い、優しく怒り、怒りながら優しく…。理屈抜きの飛躍、理屈抜きの肉表現。どうぞ観客の皆様、残暑厳しき夏の日に、この奇妙なひとときをお楽しみ下さい。



Aグループ 『天才たちの午後』

演出・清野 知之
(劇団 B-BLACK)

大海原を漂いながら、その船はやって来た。直立不動で整然と並び、ただ一点を見つめ彼等はやって来た。船着き場につくと、そこはもう彼等にとっての創造空間。ある者は叫び続け、ある者は踊り続ける。奇行ともいべきその姿は、進化を遂げた人類の姿なのかもしれない。そして、彼等の心に潜んでいる狂気と破壊的精神が、あらゆる皮膚から滲みだし、創造空間が現実空間に変化すると、彼等はまた船に乗り閉鎖された大海原に帰っていくのだ。彼等、13名の個性的かつ魅力的な役者たちが織りなす、サイコ・コメディ。どうぞごゆっくりご観劇ください。本日はご来場ありがとうございます。



Bグループ 『カラスの群れと駱駝たち』

演出・相原 和也
(山梨大学 劇団十三番創庫)

自分以外の方が書いた脚本を演出するのは今回が初めてです。最初に脚本を読んだときは、さっぱり意味がわからず先が見えませんでした。それは演出する者として致命的であり、たくさんの方々に迷惑をかけてしまうものです。そんな僕にも関わらず、演出を学ぶ機会を与えてくれた藤谷さんの勇気にびっくりです!!! 経験豊富な大勢の先輩方に教わり、相談にのってもらい、叱ってもらい、励ましてもらい…。5ヶ月間、一生懸命頑張ってきました。ここで学んだことは一生の宝です。学んだことすべてを吸収して次へと生かして行きたいと思いません。この度は本公演にお越し下さり誠に有難うございました。



書家 石原 美歩

海の神様・宮島に生まれ、山の神様・富士山の山梨で活躍中。7歳から筆を持ち始め、東京や埼玉で専門的な勉強を積み重ね、山梨芸術賞、毎日書道展毎日賞など受賞歴多数。現在は書道パフォーマンスで書の世界を広め、書道ガールズの指導、テレビ出演等、幅広く活動している。代表的な商業作品にポスター題字「吉田の火祭り」「身延どんぶり街道」などがある。演劇では初めての書道パフォーマンスを披露。謎めいた「墓守の女」役で出演します。

薩摩琵琶奏者 清水 えみこ

東京出身。南アルプス市在住。薩摩琵琶鶴旺会所属。山梨芸術文化協会会員。「平家物語」等の古典曲の他、「耳なし芳一」「源氏物語」等の創作曲も演奏。「甲斐りょうじん」「山梨邦楽合奏団響鳴」の琵琶部門担当。県内外にて幅広く活躍中。2011年6月にはイタリア、ポーロニャ国際音楽博物館にて独演。琵琶の魅力在海外の皆様にも楽しんで頂けてブラボー!



作曲 合唱指導 チャイルドフット

2003年幼なじみのマユミとエリナでチャイルドフット結成。現在はベースにSHIMOを加え、3人で関東を中心にイベントやライブハウスなどで活躍中。映画の主題歌&挿入歌なども担当。藤谷脚本の舞台では「平成龍宮事情」に出演。「基盤」の音楽提供。「難破船の仔羊たち」に出演。2013年富士の国やまなし国文祭のために、私たちが作ったイメージソング「私の好きな街」が全国公募の中から選ばれました。今後一年間、色んな場所でこの曲をお聴きになると思っていますので、是非みなさんも覚えて下さいね。今回の藤谷作品ではBグループ「カラスの群れと駱駝たち」の主題歌と合唱の指導を担当しました。どうぞお楽しみ下さい。

Aグループ『天才たちの午後』

作：藤谷 清六 演出：清野 知之（劇団 B-BLACK）



あらすじ

都一の美男子「平中さん」どうして、恋に命をかけるの・・・？
可愛い可愛い三人娘、どうして平中さんをいじめるの・・・？
意地悪されて自殺する、あ～可哀想な平中さん・・・。みんな仲良くしましょうよ。みんな一緒に帰りましょう。
医者 「さあ諸君！よく聞け。我等が棲家は天国にあり、我等が病院は天国なり。多くの友が君たちの帰りを待っている。見よ、火の柱、雲の柱を。70億の人間たちが住む、あの退屈で凡庸なる世界へと戻ろうではないか・・・。」
お手々つないでお歌を唄いみんな仲良く帰りましょう。ほら、夕焼け小焼けで日が暮れてピーポーピーポー遠ざかる、あれが僕らの救急車・・・。



琵琶ちゃん（薩摩琵琶奏者） 清水 えみこ

今を去る1300年の昔より奏でられたる琵琶の音は、時に優しく又時には激しく日本人を魅了して参りました。私も長い間、幽玄な音を求めて歓喜と挫折の狭間を行ったり来たり・・・。
さて今回「天才たちの午後」の演劇の中でこの琵琶の音色が皆様方のお心にどの様に響きますでしょうか？

演出の先生 武井 善人

今年4月で57歳になり、ある程度時間が作れるようになったけど、元々「せっかち」で「がさつ」な体育会系なので、芝居は難しくなかなか上達しないわね。今回は、武井節を封印して狂気の演出家役に挑みますよ。気高く教養が滲み出るような人間に、何処まで迫れるか、お楽(苦)しみにね。



平中 大面 総一

公演ひと月前にこのコメントを書いています。5月に稽古が始まってから数ヶ月ではありますが、密度の高い時間を過ごすことができました。この成果がみなさまの目に触れたとき、どのように感じられるか、待ち遠しく思います。お楽しみいただければ幸いです。

女A 小林 由季

演劇をはじめた20年前から、人間は多面的であるという考えのもと芝居をしています。どんな役を演じても本当の私がそこに居ます。物語の登場人物を通して、役者の善悪美醜、色々な表情が見えるから面白いって思うのです。芝居が好きって、人間が好きってことですね。

